

鳥取県米子市

陰田屋敷ノ谷遺跡

 鳥取大学附属図書館



0010699130

2003

財団法人 米子市教育文化事業団

財米子市教育文化事業団 6

陰田屋敷ノ谷遺跡

三〇〇三

0.2

on

6)

序

米子市は鳥取県西部の中核都市で、北に雄大な日本海、東に秀峰大山を臨む豊かな自然環境に恵まれています。また、古代からの遺跡の宝庫で、市内には古代人の生活や文化等を物語る貴重な遺跡が数多く存在しております。

当事業団では、この度、屋敷ノ谷農道改良工事に伴い、陰田屋敷ノ谷遺跡の発掘調査を行ってまいりました。その結果、古墳時代後期の竪穴住居跡が確認されるなど、貴重な成果を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究および教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえでお役にたてれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成15年（2003年）3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 山 岡 宏

例 言

1. 本書は鳥取県米子市陰田町において実施した屋敷ノ谷農道改良工事に伴う陰田屋敷ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は米子市耕地課の委託を受けて財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 本書は高橋が執筆、編集した。
4. 出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 発掘調査時における遺構名と報告書記載の遺構名は基本的には一致するが、一部、表1のとおり変更している。なお、竪穴住居跡及び掘立柱建物のピット番号は、調査時のものから変更している。
2. 本書に用いた方位は第2図が真北を示している以外は座標北を示し、高度はすべて海拔高である。また、座標値は国土座標第V系を用いた。
3. 第1図は1:2,500国土基本図「米子・境港市計画計画図(米子市)33」を拡大複製し、加筆したものである。また、第2図は国土地理院発行の1:25,000地形図「米子」、同「母里」、同「淀江」、同「伯耆溝口」を縮小複製、合成し、加筆したものである。
4. 本書に用いた遺構の略号は以下のとおりである。
S I : 竪穴住居跡 S B : 掘立柱建物 S D : 溝状遺構 S S : 段状遺構
5. 本文、挿図及び写真図版中の遺物番号は一致する。

旧遺構名	新遺構名
谷	自然流路
S S-04	S I-01
S D-14	S I-02
S S-05	S I-03

表1 遺構名新旧対照表

目 次

序例	言		
凡目	例		
	次		
第1章	調査の経緯	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過と方法	1
第3節	調査体制	1
第2章	位置と環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3
第3章	調査の成果	6
第1節	1区の調査	6
第2節	2区の調査	10
第3節	3区の調査	15
第4節	4区の調査	21
第4章	まとめ	31
	写真図版		
	報告書抄録		

挿 図 目 次

第1図	調査区配置図	2
第2図	調査地及び周辺遺跡分布図	5
第3図	1区遺構配置図	7
第4図	S S-01-03遺構図	8
第5図	S B-01遺構図	9
第6図	1区遺構外出土遺物実測図	10
第7図	2区遺構配置図	11
第8図	S I-01遺構図及び出土遺物実測図	12
第9図	S I-02・03遺構図及びS I-02出土遺物実測図	13
第10図	S I-02・03出土遺物実測図	14
第11図	2区自然流路遺構図及び出土遺物実測図	16
第12図	2区包含層3出土遺物実測図	17
第13図	3区遺構配置図	18
第14図	3区北壁土層図	19
第15図	3区自然流路断面図	19
第16図	S D-08-10遺構図及びS D-08出土遺物実測図	20
第17図	3区自然流路出土遺物実測図	22
第18図	3区包含層2出土遺物実測図	23
第19図	3区包含層3出土遺物実測図	23
第20図	4区遺構配置図	24
第21図	4区北壁土層図	25
第22図	4区自然流路断面図	26
第23図	4区包含層1出土遺物実測図(1)	27
第24図	4区包含層1出土遺物実測図(2)	28
第25図	4区包含層2出土遺物実測図(1)	28
第26図	4区包含層2出土遺物実測図(2)	29
第27図	4区包含層2出土遺物実測図(3)	30
第28図	自然流路全体図	32

表 目 次

表1	遺構名新旧対照表	
表2	周辺遺跡一覧表	4

図 版 目 次

- 図版 1 1区全景 (西から)
SS-01 (西から)
SB-01 (北から)
- 図版 2 SS-02 (東から)
SS-02 (西から)
SS-02 (北から)
- 図版 3 SS-01・03 (東から)
SS-01・03 (西から)
SS-03 (東から)
- 図版 4 2区全景 (東から)
2区全景 (西から)
2区自然流路 (東から)
- 図版 5 SI-01 (東から)
SI-01 (西から)
SI-01 (北から)
- 図版 6 SI-02・03 (東から)
SI-02・03 (西から)
SI-02・03 P-6 砥石 (21) 出土状況
- 図版 7 3区全景 (東から)
3区全景 (西から)
3区自然流路 (東から)
- 図版 8 SD-08 土馬 (39) 出土状況
4区包含層 2 遺物 (84) 出土状況
4区包含層 2 遺物 (83・93・97) 出土状況
- 図版 9 4区全景 (東から)
4区全景 (西から)
- 図版 10 SI-01-03、SD-08、2区・3区自然流路
出土遺物
- 図版 11 1区遺構外、2区包含層 3 出土遺物
- 図版 12 3区包含層 2・3、4区包含層 1 出土遺物
- 図版 13 4区包含層 2 出土遺物

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、米子市が事業主体である屋敷ノ谷農道改良工事に伴い、米子市除田町地内において実施したものである。

調査地は周知の遺跡として認識されていないが、周辺では一般国道180号（米子バイパス）道路改良工事や一般国道9号（米子道路）道路改良工事等に伴って発掘調査が行われ、縄文時代～近世の遺構・遺物が確認されている。また、平成14年（2002年）4月には、工事に先立ち、米子市教育委員会によって事業地内の試掘調査が行われ、弥生時代～平安時代の遺物が確認された。これを受けて米子市耕地課は米子市教育委員会と協議を行い、事前の発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより、平成14年度（2002年度）に財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過と方法

現地調査は平成14年（2002年）10月に着手した。

調査を行うにあたっては、排土の一部を工事で再利用するということから、排土は場外へ搬出せず、事業地内に仮置きしなければならない。そのため事業地全体を一度に調査することは不可能であり、調査の進捗状況も考えて調査区を4つに分けて調査を行った。調査区は東から1区～4区（第1図）とし、調査は1区→4区→3区→2区の順番で行った。

調査は、試掘調査の結果を勘案しながら重機により表土を除去した後、人力により掘り下げを行い、遺構、遺物の検出を行った。現地調査は平成14年（2002年）11月に終了した。

現地調査終了後は出土遺物の整理作業、調査成果のまとめを行い、発掘調査報告書を刊行した。

第3節 調査体制

発掘調査は下記の体制で行われた。

調査主体 財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田隆朝（米子市長：平成14年4月1日～平成14年5月27日）

山岡 宏（米子市教育委員会教育長：平成14年5月28日～）

専務理事 山岡 宏（平成14年4月1日～平成14年5月27日）

小林道正（財団法人米子市教育文化事業団 事務局長：平成14年5月28日～）

埋蔵文化財調査室

室長 妹澤佐智夫

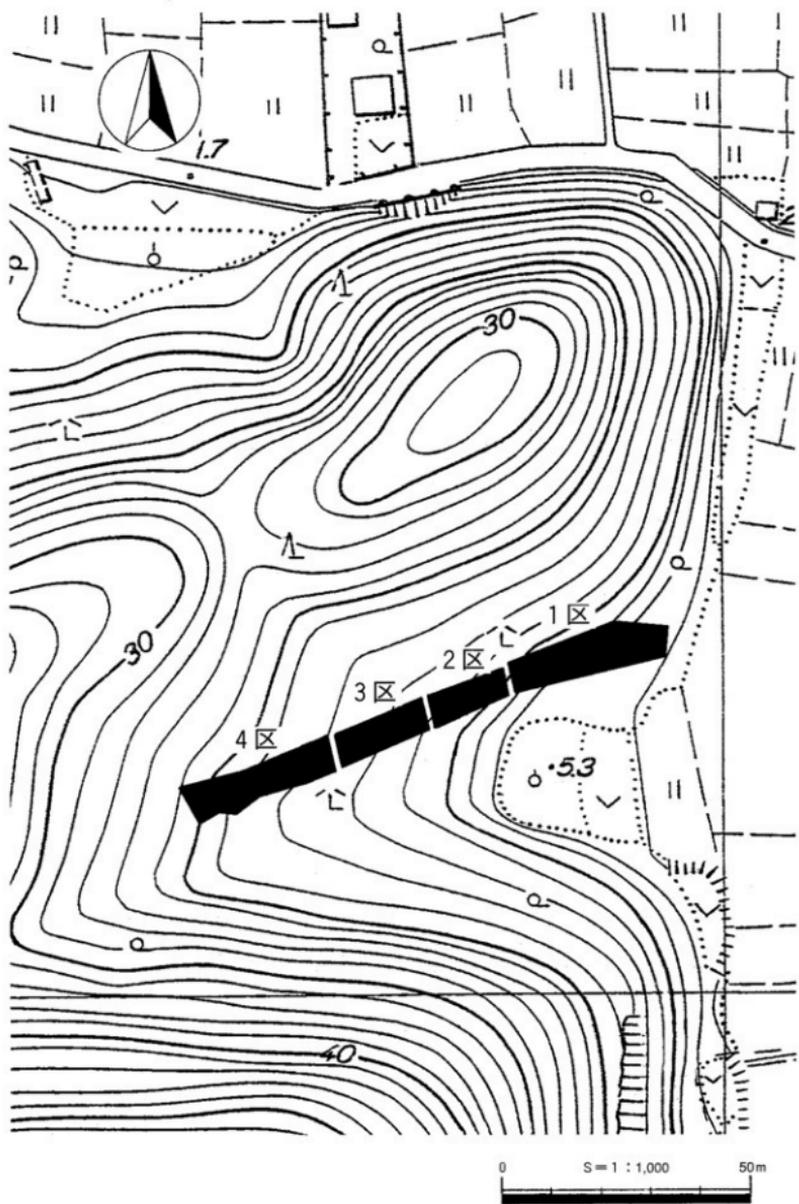
次長 矢倉紀夫

調査担当 財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室

調査員 高橋浩樹

臨時職員 遠本富代

調査指導 鳥取県教育委員会 鳥取県埋蔵文化財センター 米子市教育委員会



第1図 調査区配置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

米子市は鳥取県の最西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

米子市の地勢は市の東部を北流する日野川によって形成された米子平野を中心に、その北西には弓浜半島と中海、北には日本海、東には大山からつづく丘陵、南から南西には中国山地からつづく山地や丘陵が取り囲んでいる。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積湿地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した2条の砂州からなる日津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積性の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野）、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。

陰田屋敷ノ谷遺跡は米子市陰田町に所在する。米子市陰田町は米子市の西部に位置し、市街地から直線距離で約2.3kmにあり、西側は鳥根県安来市と接している。現在の景観は古代の行政区分においても出雲国と伯耆国との国境にあたり、この地は古くから雲伯往來の要地としての役割を果たしてきた。

調査地周辺は山林、竹林、果樹園、田畑が広がる農村的景観を呈しているが、北側の中海沿岸には国道9号とJR山陰本線が通り、南側の丘陵部には近年、国道9号米子バイパス（山陰自動車道）と国道180号バイパスが整備され、交通の要衝地として今後の発展が望まれる地である。

調査地は南西―北東方向へのびる丘陵の南側の裾部及び谷部に立地している。

第2節 歴史的環境

周辺での人々の生活の痕跡は縄文時代草創期まで遡り、陰田宮の谷遺跡（19）、奈喜良遺跡（10）、古谷亀尾ノ上遺跡（38）、諸木遺跡（43）からは尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では清水谷遺跡（39）と新山山田遺跡（26）から押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末～前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美遺跡（1）、陰田第1遺跡（18）、陰田第7遺跡（15）、陰田第9遺跡（17）がある。目久美遺跡は縄文時代早期末～弥生時代中期の遺跡で、当該期には貝殻条痕文土器、爪形文土器、多量の石錘、動植物遺体が出土している。

中期には遺跡の数が減少する傾向にあり、現在のところあまり明確にされていないが、周辺では目久美遺跡でドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には目久美遺跡、陰田第1遺跡、陰田第7遺跡、古市カハラケ田遺跡（29）、古市河原田遺跡（30）、青木遺跡（9）などがある。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山山田遺跡（24）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとめて出土している。

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落を形成し、長砂第1遺跡（3）でも前期後葉～中期初期の水田が確認されている。また、前期末～中期前半には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（45）、天王原遺跡

(51) で断面V字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、目久美遺跡、長砂第2遺跡(4)では水田が確認されている。

中期後葉～後期には遺跡は低地から低丘陵へ移動する傾向にあり、前期～中期の拠点集落は継続するものは少なく、青木遺跡、福市遺跡(8)、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群のように新たに拠点集落が形成され、古墳時代へと継続する。

古墳時代は前期に日原6号墳(7)、普段寺1号墳(50)などが築かれ、普段寺1号墳からは三角縁神獸鏡が出土している。前期の集落には青木遺跡、福市遺跡、吉谷上ノ原山遺跡(36)、吉谷トコ遺跡(37)、奈喜良遺跡、清水谷遺跡などがある。

中期には西伯耆最大規模を誇る三崎殿山古墳(44)、福成4号墳(40)などがあり、福成4号墳では頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。中期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、吉谷トコ遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡(25)、清水谷遺跡などがある。

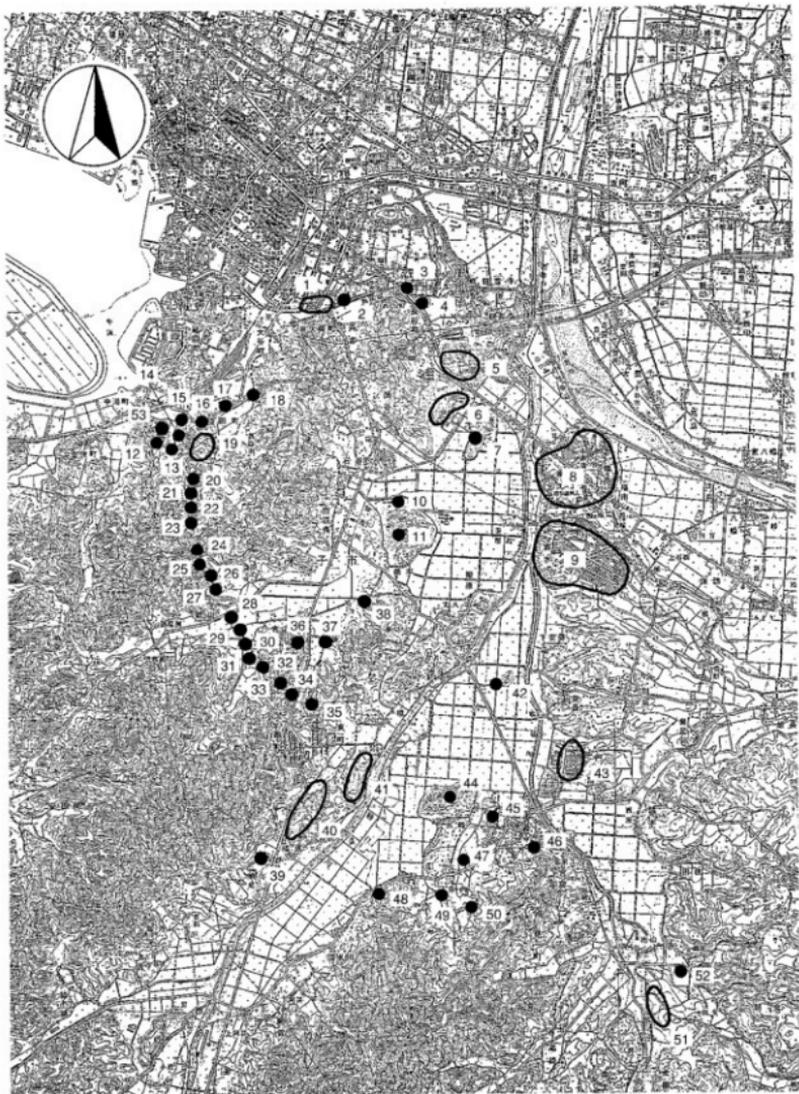
後期には群集墳がつくられるようになり、この周辺には古市古墳群、新山古墳群、新山山田古墳群(27)、福成古墳群(40)がある。また、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、6世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ鳥取県最大の陰田横穴墓群、大塔山横穴墓群、マケン堀横穴墓群などがあり、これらはいずれも後背部に墳丘を有するという特色をもつ。後期の集落には青木遺跡、福成早里遺跡(41)、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～奈良時代には新山遺跡群(24～26)、奥陰田遺跡群(16・19～23)、陰田遺跡群(12～14)などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鉄生産を行っており、7世紀後半以降、官衙的性格が強くなる。

中世には周辺では新山城(長台寺城)、橋本宝石城(11)が築城される。

1 目久美遺跡	2 池ノ内遺跡	3 長砂第1遺跡	4 長砂第2遺跡
5 東宗像古墳群	6 宗像古墳群	7 日原6号墳	8 福市遺跡
9 青木遺跡	10 奈喜良遺跡	11 橋本宝石城	12 陰田荒神谷遺跡
13 陰田小犬田遺跡	14 陰田ヒチリザコ遺跡	15 陰田第7遺跡	16 陰田第6遺跡
17 陰田第9遺跡	18 陰田第1遺跡	19 陰田宮の谷遺跡	20 陰田広畑遺跡
21 陰田隠れが谷遺跡	22 陰田ハタケ谷遺跡	23 陰田夜坂谷遺跡	24 新山下山遺跡
25 新山研石山遺跡	26 新山山田遺跡	27 新山山田古墳群	28 古市流田遺跡
29 古市カハラケ田遺跡	30 古市河原田遺跡	31 古市コガノ木遺跡	32 古市宮ノ谷山遺跡
33 吉谷屋奈ヶ塔遺跡	34 吉谷銭神遺跡	35 吉谷中馬場山遺跡	36 吉谷上ノ原山遺跡
37 吉谷トコ遺跡	38 吉谷亀尾ノ上遺跡	39 清水谷遺跡	40 福成古墳群
41 福成早里遺跡	42 大袋丸山遺跡	43 諸木遺跡	44 三崎殿山古墳
45 宮尾遺跡	46 天万遺跡	47 天萬土井前遺跡	48 枇杷谷遺跡
49 寺内8号墳	50 普段寺1号墳	51 天王原遺跡	52 口朝金遺跡
53 陰田屋敷ノ谷遺跡			

表2 周辺遺跡一覧表



0 S=1:50,000 2.5km

第2図 調査地及び周辺遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 1区の調査

1. 概要

1区は最も東側に位置する調査区で、丘陵南側の裾部から谷部にかけて立地する。基本層序は現地表面から表土→丘陵上部からの崩落土→基盤層となっており、遺構は基盤層上面で検出した。

検出した遺構は段状遺構3基、掘立柱建物1棟、溝状遺構7条、土坑1基である。

2. 検出した遺構

段状遺構

段状遺構は3基検出した。

調査地は元々竹藪と梨畑であり、丘陵斜面にはこれらのために造成されたものと思われる平坦面が見られる。検出した段状遺構は時期を特定することはできないが、近世以降の遺物が認められないことと、段状遺構上に掘立柱建物が存在することから、少なくとも近世以降の竹藪や梨畑の造成に伴うものではなく、陰田地区の丘陵南側斜面で普遍的に見られる古墳時代後期～平安時代の段状遺構ではないかと思われる。

段状遺構はいずれも重複しているが、切合関係は確認できなかった。なお、段状遺構の壁面については道路工事の法面の関係で全面的に調査することができないため、適宜、トレンチを入れて確認した。その結果、トレンチ2で基盤層からなるSS-01の壁面を確認したが、トレンチ1ではSS-02の壁面は確認できなかった。

SS-01 (第4図)

SS-01は南側が流失しているが、平坦面の規模は現状で長さ13.5m以上、幅はトレンチ2の部分で3.5mをはかり、標高は6.0～6.7mである。平坦面の東側と北側には溝がL字状に巡っており、その規模は幅0.8～1.8m、深さ0.1～0.2mをはかる。トレンチ2の部分で壁面を確認しており、その傾斜度は約45°である。

SS-01では掘立柱建物1棟を検出した。

遺物は遺構面直上のものは皆無であるが、丘陵上部からの崩落土から須恵器、土師器が少量出土した。

SS-02 (第4図)

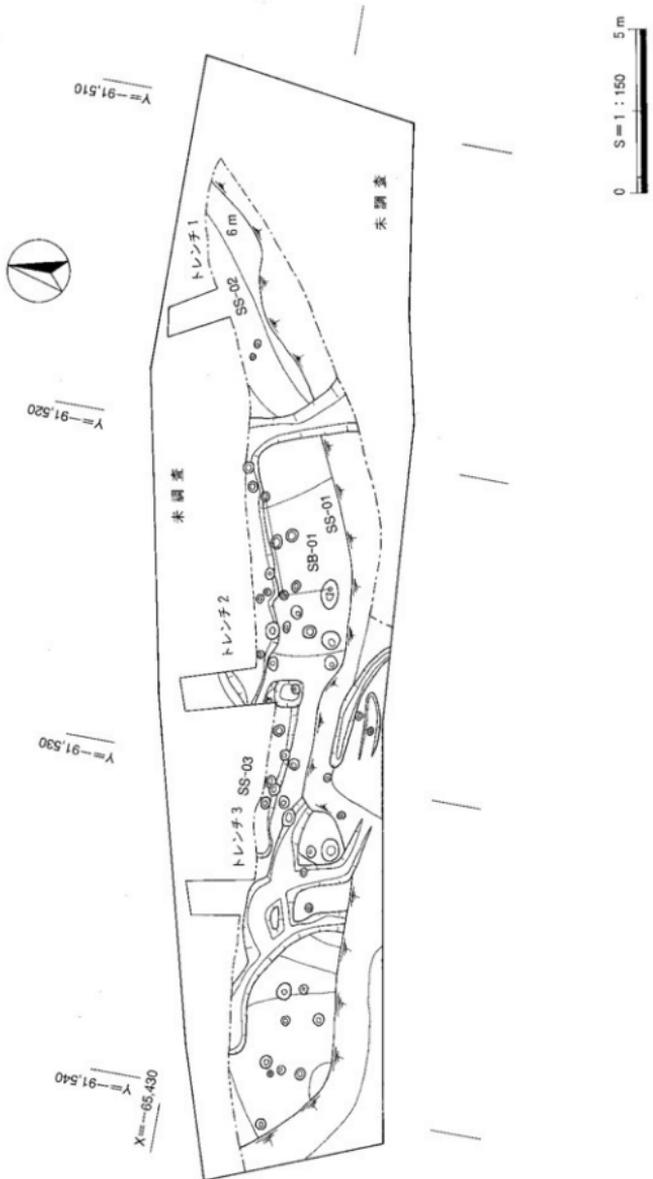
SS-02はSS-01の東側に位置し、SS-01と一部重複している。南側は流失しているが、規模は現状で長さ7.5m以上、幅はトレンチ1の部分で3m以上をはかり、標高は5.8～6.3mである。壁面については、トレンチを入れて確認を試みたが、調査区内では確認できず、調査区外に存在するものと思われる。

SS-02ではピット2基を検出したのみで、遺物は丘陵上部からの崩落土から須恵器、土師器が少量出土した。

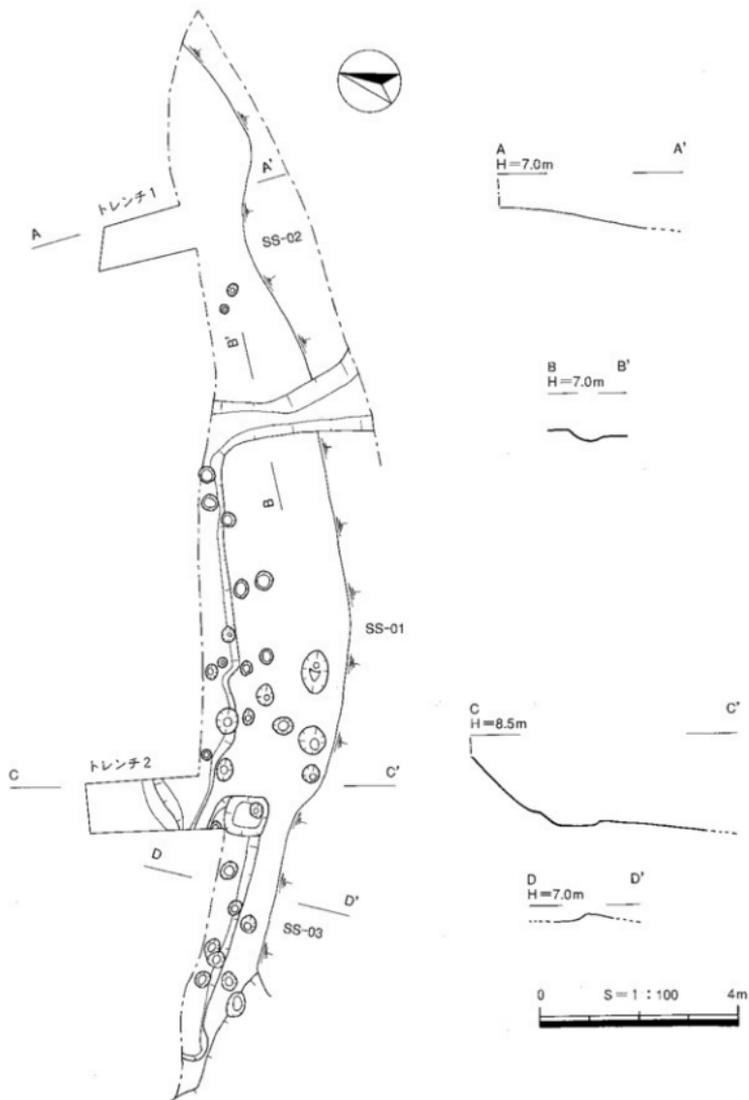
SS-03 (第4図)

SS-03はSS-01の西側に位置し、SS-01と一部重複している。南側は流失しているが、西側では基盤層からなる壁面を確認しており、規模は現状で長さ6.5m以上、幅はトレンチ2の状況から判断して2m以上をはかるものと思われる。標高は6.8～7.2mである。平坦面の北側には溝が存在するが、東側及び西側は削平を受けているために残存していない。溝の規模はトレンチ2の部分で幅1.1m、深さ0.2mをはかる。

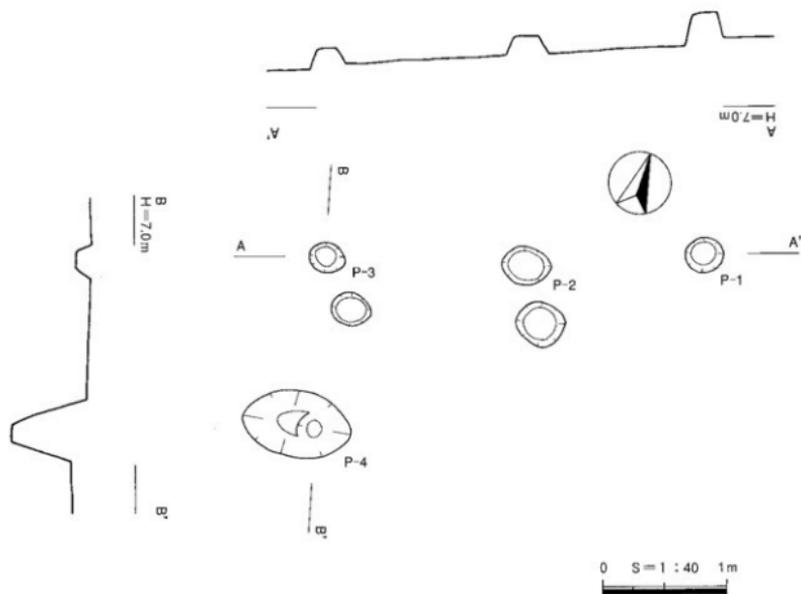
遺物は遺構面直上のものは皆無であるが、丘陵上部からの崩落土から須恵器、土師器が少量出土した。



第3図 1区遺構配置図



第4図 SS-01~03遺構図



第5図 S B-01遺構図

掘立柱建物

掘立柱建物はSS-01上で1棟検出した。

S B-01 (第5図)

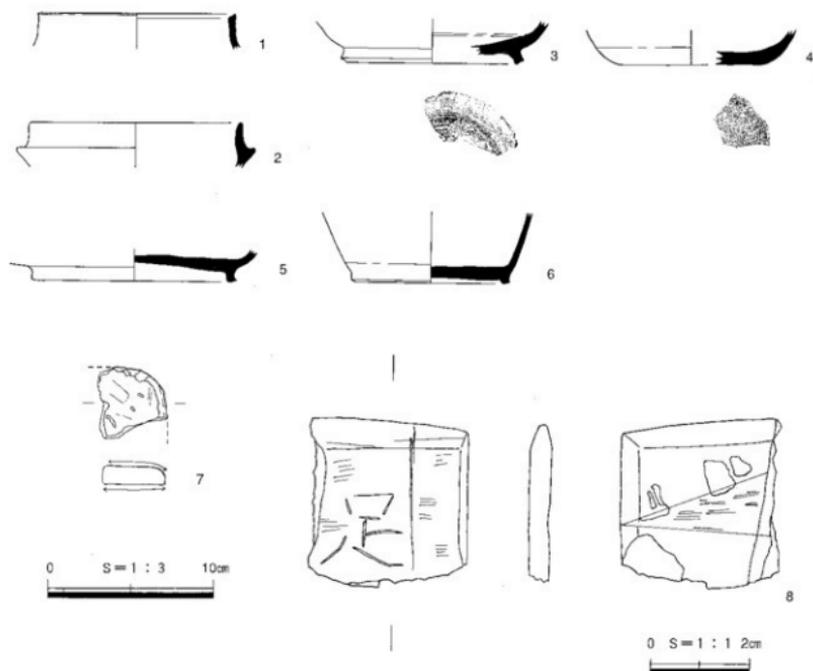
S B-01はSS-01で検出したもので、桁行2間、梁行1間分を確認した。

柱穴の規模はP-1 (31×29-29) cm、P-2 (33×40-17) cm、P-3 (31×25-18) cm、P-4 (43×20以上-48) cmをはかり、柱間距離はP-1～P-2が1.4m、P-2～P-3が1.6m、P-3～P-4が1.4mで、P-1～P-2とP-3～P-4は等間であるが、P-2～P-3はやや広くなっている。主軸方向はN-70° Eである。

遺物は出土しなかった。

3. 遺構外出土遺物 (第6図)

1～8はいずれも表土から出土したもので、1～6は須恵器、7は砥石、8は石板である。1、2は受部を有する坏身で、1の口縁端部には浅い窪みが認められ、2の口縁端部は丸くおさまる。3、4は底部外面に回転糸切りを施した坏身で、3は高台を有する。5、6は高台を有し、いずれも底部外面は底部切り離した後ナデ調整が施されている。7は2面の研磨面が認められる。8は2辺を欠損するが、残りの2辺の縁辺部は面取りが施されている。また、表面には方形の区画線が線刻され、「足」の刻書が認められる。



第6図 1区遺構外出土遺物実測図

第2節 2区の調査

1. 概要

2区は1区の西側に位置する調査区で、丘陵南側の裾部から谷部にかけて立地する。基本層序は現地表面から表土→明褐色土となっており、遺構は明褐色土上面で検出した。

検出した遺構は竪穴住居跡3棟、自然流路1条である。

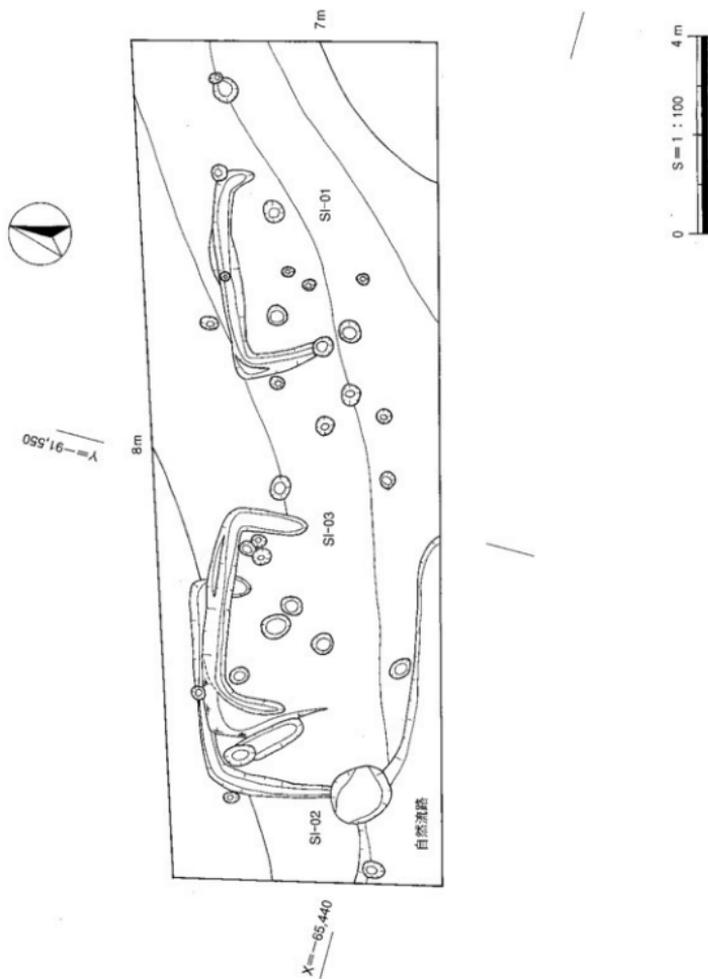
2. 検出した遺構と遺物

竪穴住居跡

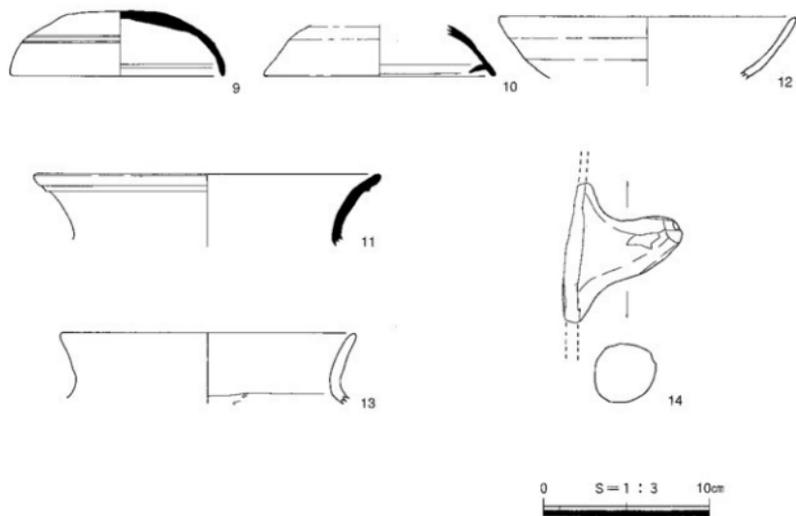
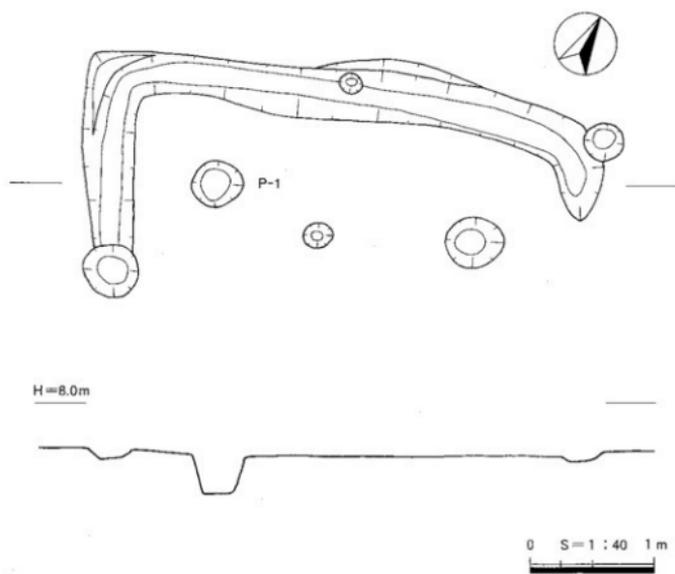
竪穴住居跡は3棟検出した。いずれも丘陵南側裾部の緩斜面に立地するもので、S I-02はS I-03によって切られている。

第10図はS I-02あるいはS I-03のいずれかに伴うものと思われる。

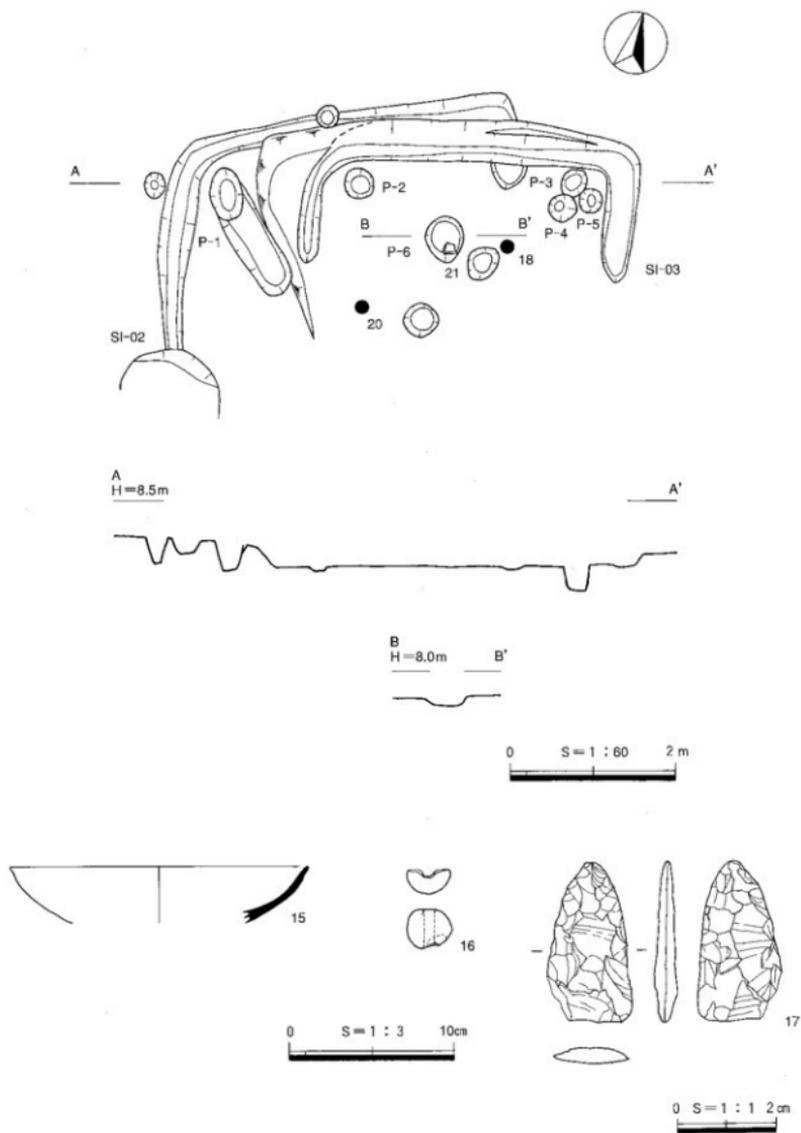
18~20は須恵器、21、22は砥石である。18は受部を有する坏身で、口縁端部は丸くおさまる。19、20は高坏の脚部で、2方向に台形の透かし孔が穿たれている。21はP-6から出土したもので、2面の研磨面が認められる。



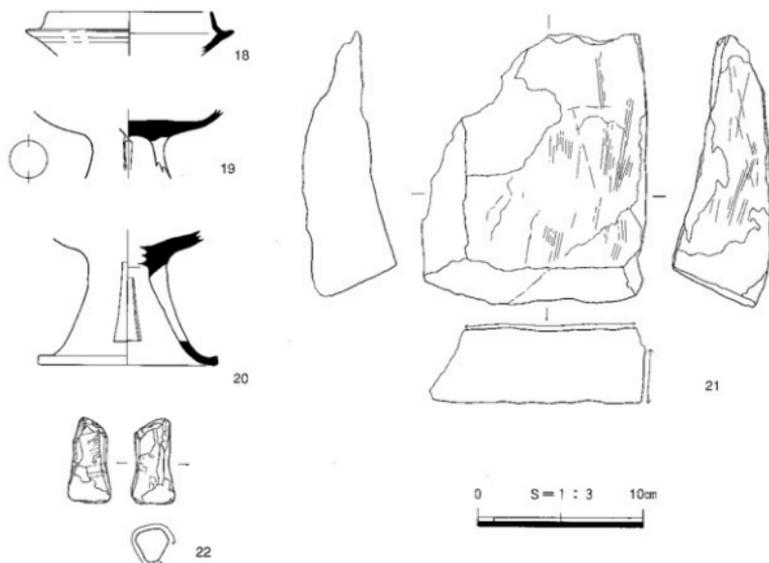
第7图 2区遺構配置図



第8図 S1-01遺構図及び出土遺物実測図



第9図 S I -02・03遺構図及びS I -02出土遺物実測図



第10図 S I-02・03出土遺物実測図

S I-01 (第8図)

S I-01は2区の東側に位置し、標高7.5~7.8mの丘陵南側裾部の緩斜面に立地する。南側は流失しているが、平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は東西長4.2m、南北長1.7m以上をはかる。周壁溝は西~北~東と巡っており、その規模は幅0.3~0.4m、深さ0.1mをはかる。

主柱穴はP-1の1基のみを確認し、その規模は(43×39-33)cmをはかる。

北側と北西隅では周壁溝が重複しており、建替えが行われたものと思われる。

遺物は周壁溝から須恵器(9-11)、土師器(12、13)、瓶(14)が出土した。9、10は坏蓋で、9は天井部と口縁部との境界の稜が退化したもので、2条の沈線が巡っている。10は返りを有する。11、13は甕の口縁部、12は高坏の坏部、14は瓶の把手部である。

時期は出土遺物から7世紀前葉頃であると考えられる。

S I-02 (第9図、第10図)

S I-02は2区の西側に位置し、標高7.7~8.1mの丘陵南側裾部の緩斜面に立地する。東側はS I-03によって切られているが、平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は東西長4.6m、南北長2.6m以上をはかる。周壁溝は西~北~東と巡っており、その規模は幅0.2~0.4m、深さ0.1~0.2mをはかる。

主柱穴はP-1の1基のみを確認し、その規模は(40×62-38)cmをはかる。

遺物は周壁溝から須恵器(15)、土玉(16)、石鏃(17)が出土した。17は安山岩製である。

時期は出土遺物から7世紀前葉頃であると考えられる。

S I-03 (第9図、第10図)

S I-03は2区の西側に位置し、標高7.7~8.0mの丘陵南側裾部の緩斜面に立地する。南側は流失しているが、平面形態は方形を呈するものと思われ、規模は東西長4.3m、南北長2.0m以上をはかる。周壁溝は西~北~東と巡っており、その規模は幅0.2~0.5m、深さ0.1mをはかる。

主柱穴はP-2とP-3の2基のみを確認し、その規模はP-2 (38×38-16) cm、P-3 (34×34-24) cmをはかり、柱間距離は2.6mである。

北側では周壁溝が重複し、住居跡北東には主柱穴と思われるP-3~P-5が近接しており、建替えが行われたものと思われる。

時期は出土遺物から7世紀前葉頃であると考えられる。

自然流路 (第11図、第28図)

自然流路は3区・4区の自然流路からつながるものと思われ、2区では大部分が調査区外にかかるが、長さ7.2m分を検出した。規模は現状で最大幅1.7m、深さ0.1~0.3mをはかり、西から東へ緩やかに傾斜している。

遺物は須恵器 (23、24)、土玉 (25)、礫石 (26) が出土した。23、24は坏身で、23は受部を有し、口縁端部は丸くおさまる。24は内湾気味に立上がり、口縁端部が外反する。26は3面の研磨面が認められる。

3. 遺構外出土遺物 (第12図)

27~38は包含層3から出土したもので、27~36は須恵器、37は土玉、38は土製支脚である。

27は杯蓋で、輪状つまみを有する。28~30は坏身で、28は受部を有し、口縁部の立上がりは短く、口縁端部は丸くおさまる。29の底部外面は底部切り離し後ナデ調整が施され、30の底部外面には糸切りが施されている。31は坏身あるいは高坏の坏部、32、33は高坏、34は堤瓶あるいは平瓶の口縁部であると思われる。35、36は甃で、いずれも外面には平行叩き、内面には同心円叩きが施され、さらに36の外面にはカキ目が施されている。

第3節 3区の調査

1. 概要

3区は2区の西側に位置する調査区で、谷部に立地する。基本層序は現地表面から表土→淡褐色土 (礫混じり) →包含層2→包含層3となっており、遺構は包含層3上面で検出した。

検出した遺構は溝状遺構3条、自然流路1条である。

2. 検出した遺構と遺物

S D-08 (第16図)

S D-08は「く」字状を呈しており、長さ4.6m、幅0.1~0.5m、深さ0.1~0.2mをはかる。

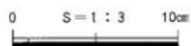
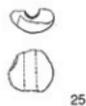
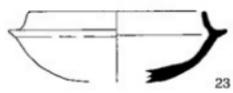
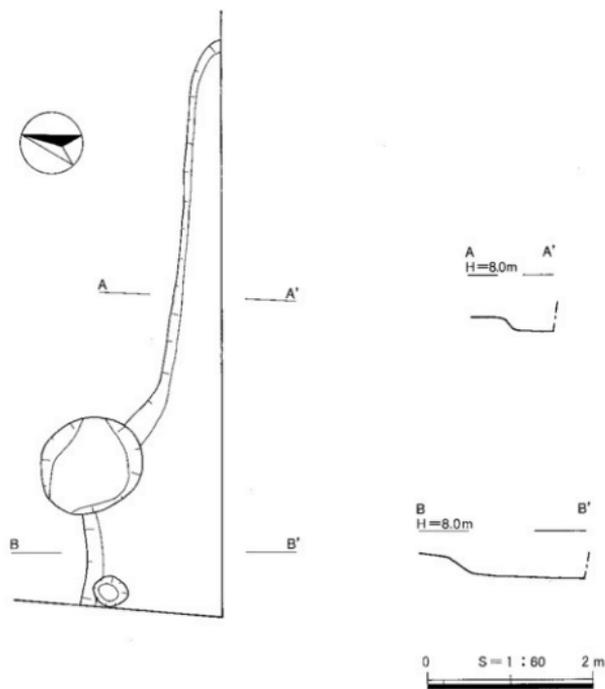
遺物は土馬 (39) が出土した。39は須恵質で、頭部、脚部、尻部を欠損するが、後脚の間には雄の性器、尻部には尻穴を表現した刺突が認められる。

S D-09 (第16図)

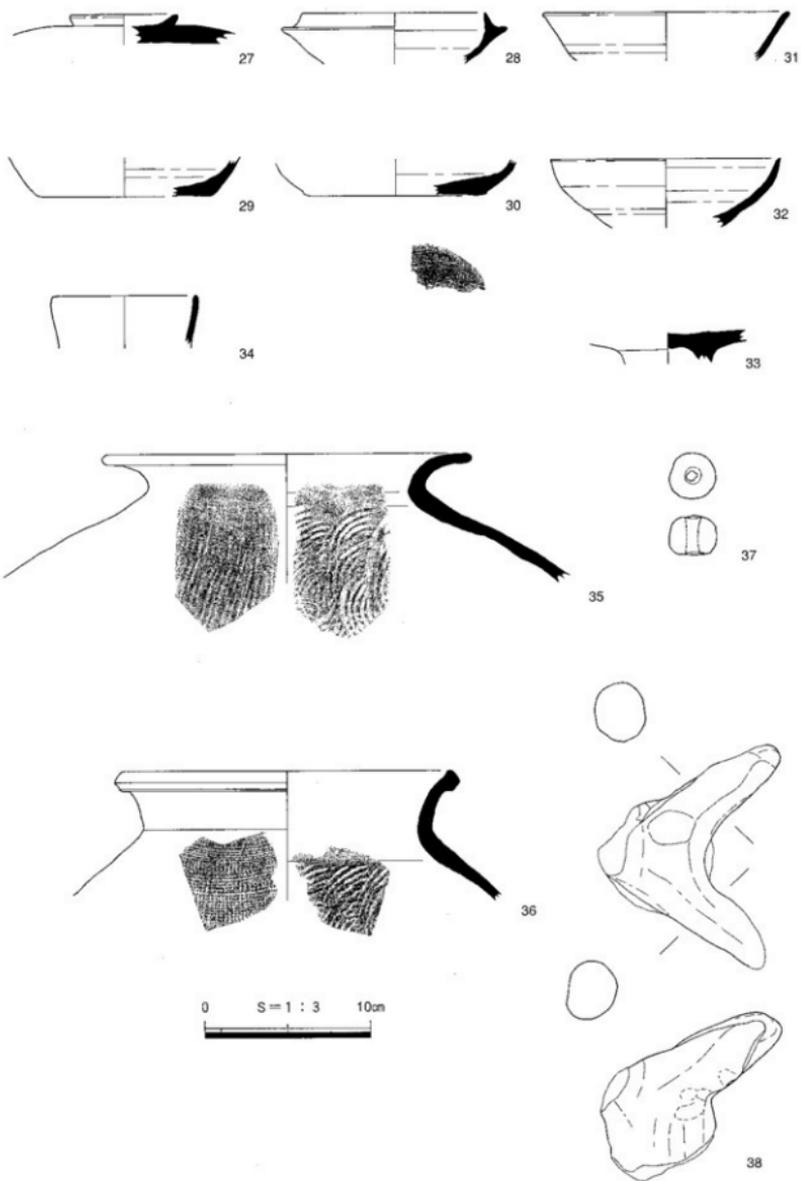
S D-09は長さ3.4m、幅0.5~1.0m、深さ0.2~0.3mをはかり、主軸方向はN-90°-Eである。

S D-10 (第16図)

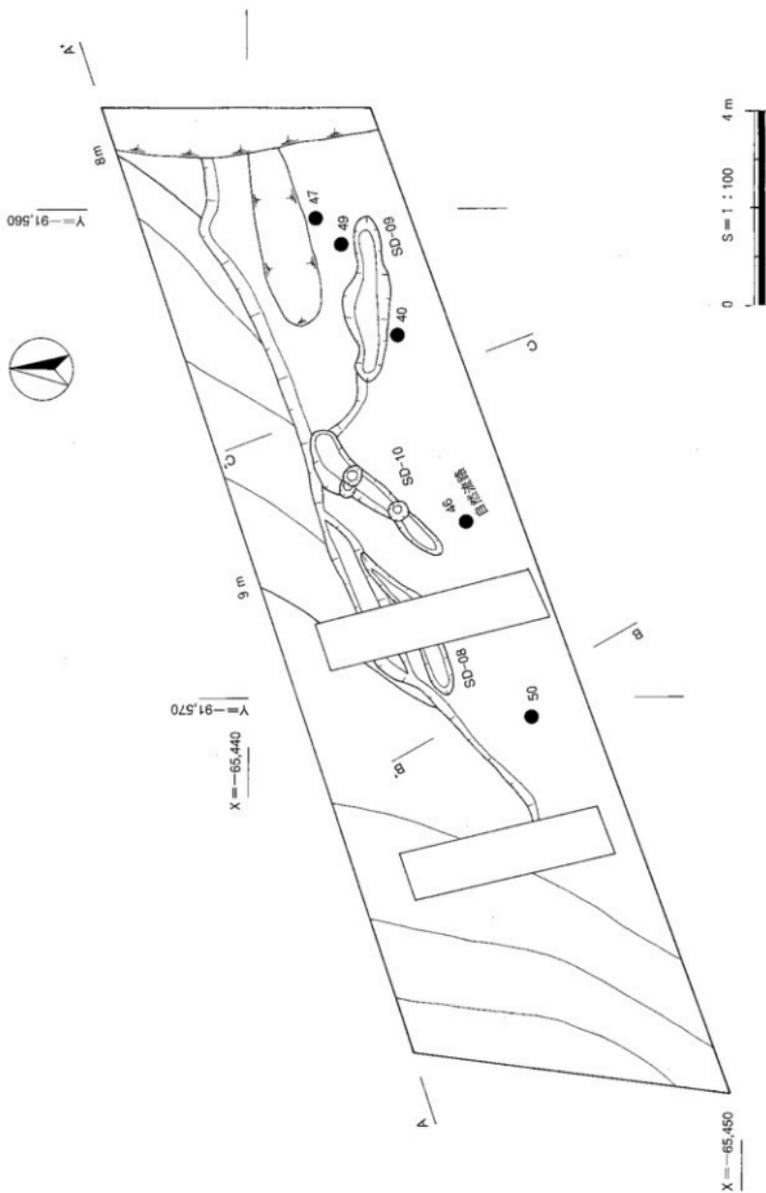
S D-10は長さ3.6m、幅0.3~0.8m、深さ0.1~0.2mをはかり、主軸方向はN-44°-Eである。



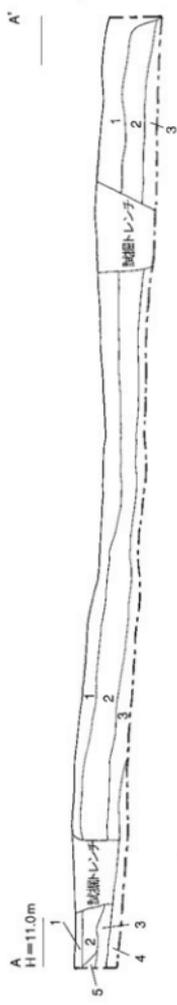
第11图 2区自然流路遺構図及び出土遺物実測図



第12图 2区包含层3出土遗物实测图

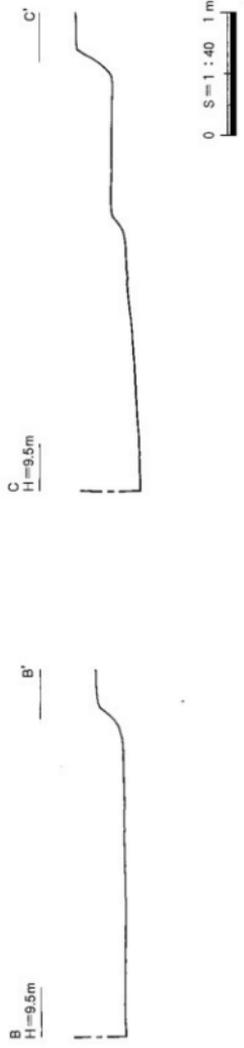


第13図 3区遺構配置図

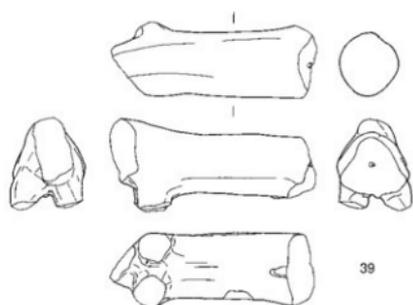
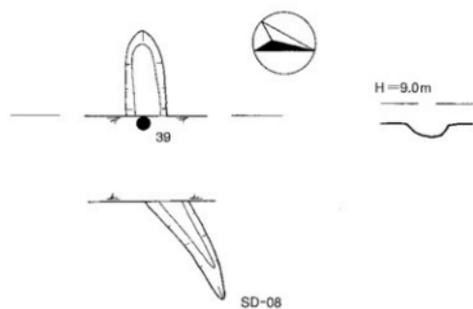


- 土
- 1 表土 (薄層じり)
 - 2 深褐色土 (薄層じり)
 - 3 灰褐色土 (包含層 2: 薄層じり)
 - 4 淡灰色土 (包含層 3: 薄層じり)
 - 5 細灰褐色土

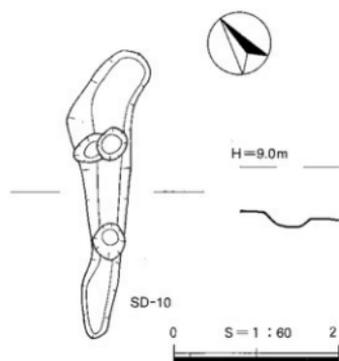
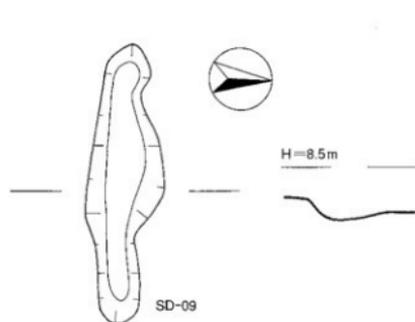
第14図 3区北壁土層図



第15図 3区自然流断面図



0 S = 1 : 3 10cm



0 S = 1 : 60 2m

第16図 SD-08~10遺構図及びSD-08出土遺物実測図

自然流路 (第13図、第15図、第17図、第28図)

自然流路は南側の肩が調査区外に位置するものと思われるが、現状で幅1.8~4.2m、深さ0.1~0.3mをはかる。

遺物は須恵器、砥石が出土した。40~49は須恵器、50は砥石である。

40、41は坏蓋で、40は口縁部が内湾し、天井部と口縁部との境界の稜は認められない。41は返りが消失したもので、天井部につまみがつくものと思われる。42~45、47は坏身で、42~44は高台を有し、底部外面は底部切り離し後ナデ調整を施している。45、47の底部外面には回転糸切りが施されている。46は皿で、底部外面には回転糸切りが施されている。48、49は甕で、いずれも外面には平行叩き、内面には同心円叩きが施されている。50は2面の研磨面が認められる。

3. 遺構外出土遺物 (第18図、第19図)

51~53は包含層2、54~56は包含層3から出土したものである。

包含層2からは須恵器(51、52)、土製支脚(53)が出土した。51、52は坏身で、52は高台を有し、いずれも底部外面には回転糸切りが施されている。

包含層3からは須恵器(54~56)、砥石(57)が出土した。54は坏蓋、55は坏身で、底部外面には静止糸切りが施されている。56は甕の口縁部で、外面には波状文が巡っている。57は1面が欠損するが、残りの3面には研磨面が認められる。

第4節 4区の調査

1. 概要

4区は最も西側に位置する調査区で、谷部に立地する。基本層序は調査区の西側では現地表面から表土→灰色土(礫混じり)→淡褐色土(礫混じり)→茶灰色土(礫混じり)→暗褐色土(礫混じり)となっているが、調査区中央付近では淡褐色土(礫混じり)と茶灰色土(礫混じり)がみられなくなり、調査区の東側では表土、灰色土(礫混じり)以下に包含層が2層(包含層1・2)が認められる。なお、包含層2は3区の包含層2と対応する。遺構は暗褐色土(礫混じり)上面で検出した。

検出した遺構は自然流路1条である。

2. 検出した遺構と遺物

自然流路 (第20図、第22図、第28図)

自然流路は遺物の有無を確認するためにトレンチを入れたのみで完掘していない。また、南側の肩が調査区外に位置するものと思われるが、規模は現状で幅2.2~3.2m、深さ0.3~0.8mをはかる。

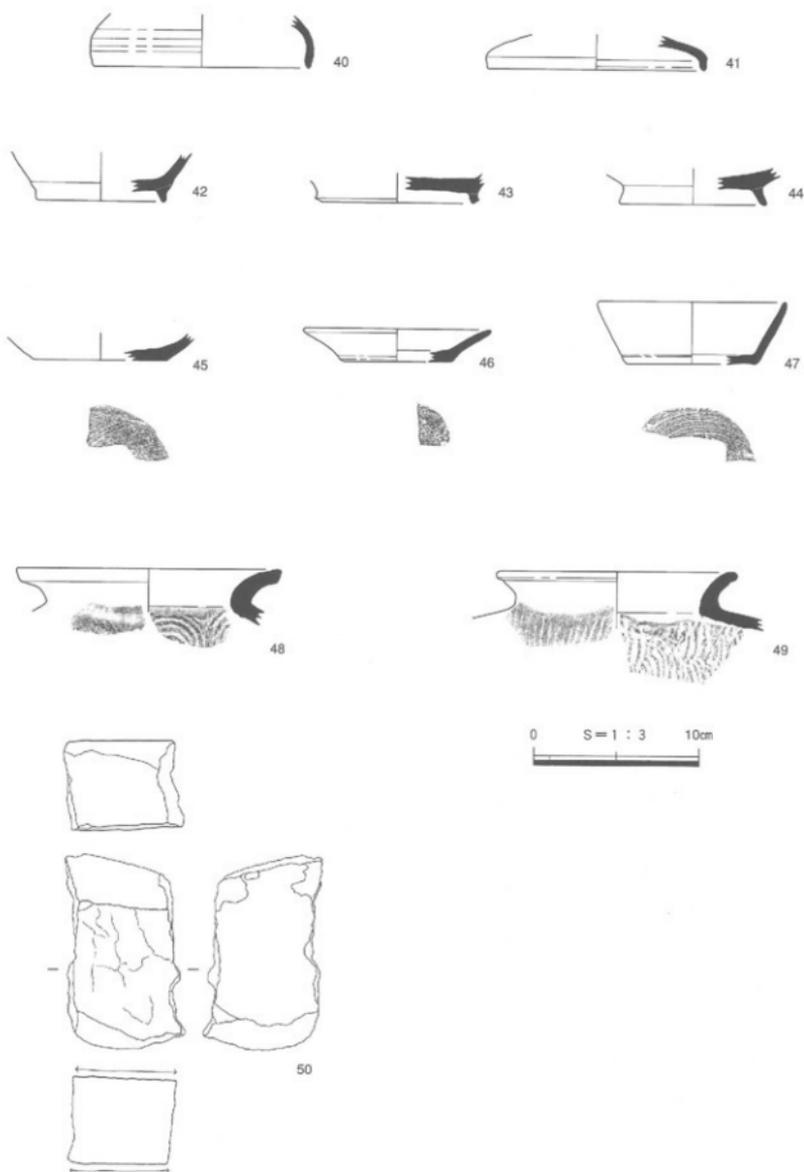
遺物は図示できないが、須恵器、土師器が出土した。

3. 遺構外出土遺物 (第23図~第27図)

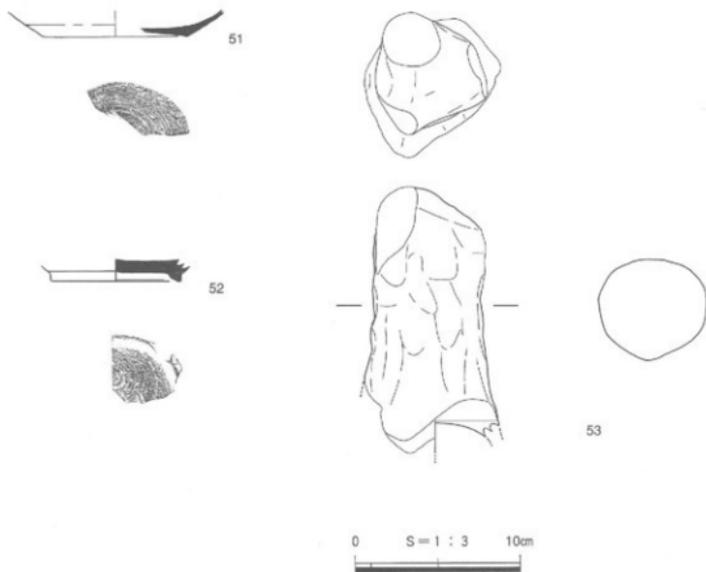
58~77は包含層1、78~103は包含層2から出土したものである。

包含層1からは須恵器、土師器、石畿が出土した。

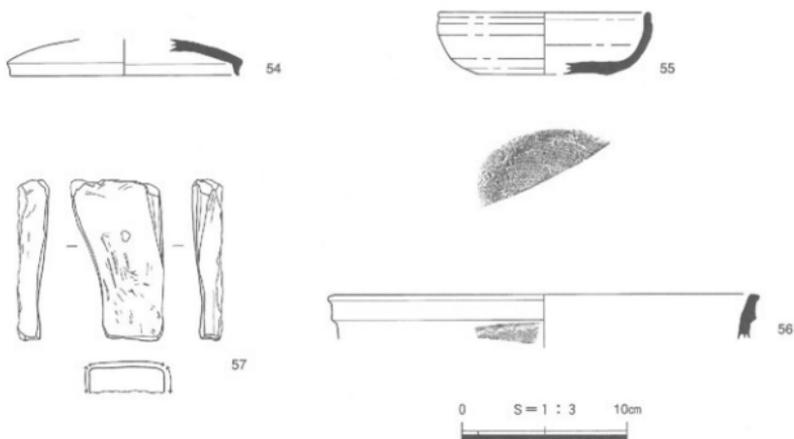
58~73は須恵器で、58は坏蓋、59、65~71は坏身、60~64は碗である。59は受部を有するもので、口縁部の立上がりは短く、口縁端部は丸くおさまる。65、66は内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反し、67は外傾気味に立ち上がる。なお、65~68の底部外面には回転糸切りが施されている。69~71は底部で、71は高台を有し、



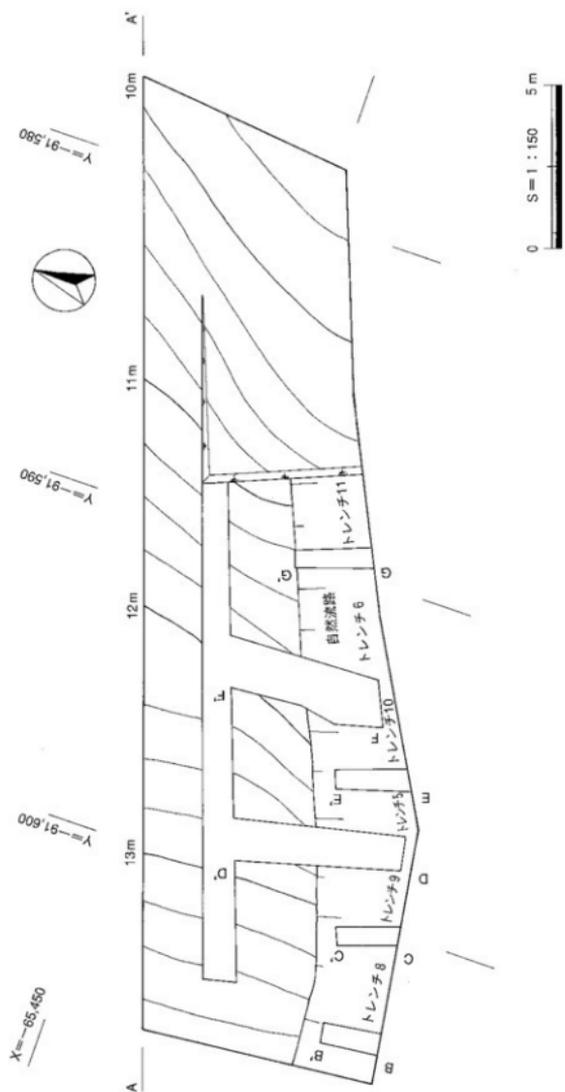
第17图 3区自然流路出土遺物实测图



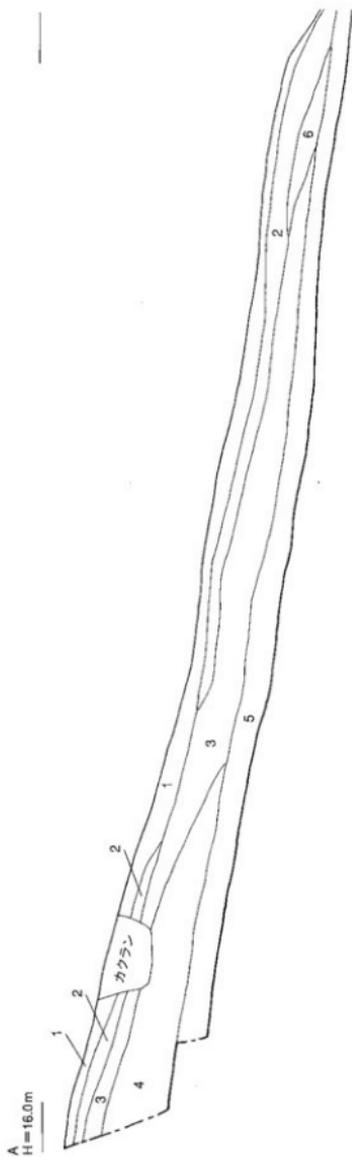
第18图 3区包含层2出土遗物实测图



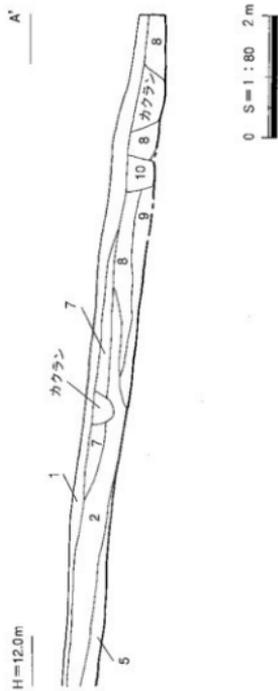
第19图 3区包含层3出土遗物实测图



第20図 4区透視配置図



- 土 質
- 1 表土 (硬湿じり)
 - 2 灰色土 (硬湿じり)
 - 3 淡褐色土 (硬湿じり)
 - 4 赤灰色土 (硬湿じり)
 - 5 暗褐色土 (硬湿じり)
 - 6 深褐色土 (硬湿じり)
 - 7 深灰色土 (硬湿じり)
 - 8 暗灰褐色土 (包含層1: 硬湿じり)
 - 9 灰褐色土 (包含層2: 硬湿じり)
 - 10 淡黄灰色土



第21図 4区北壁土層図

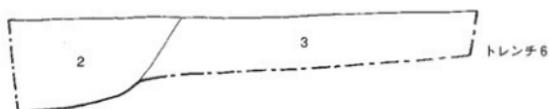
B B'
H=14.5m



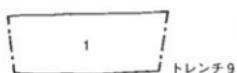
G G'
H=12.0m



F F'
H=12.5m



C C'
H=13.5m



E E'
H=12.5m



D D'
H=13.5m

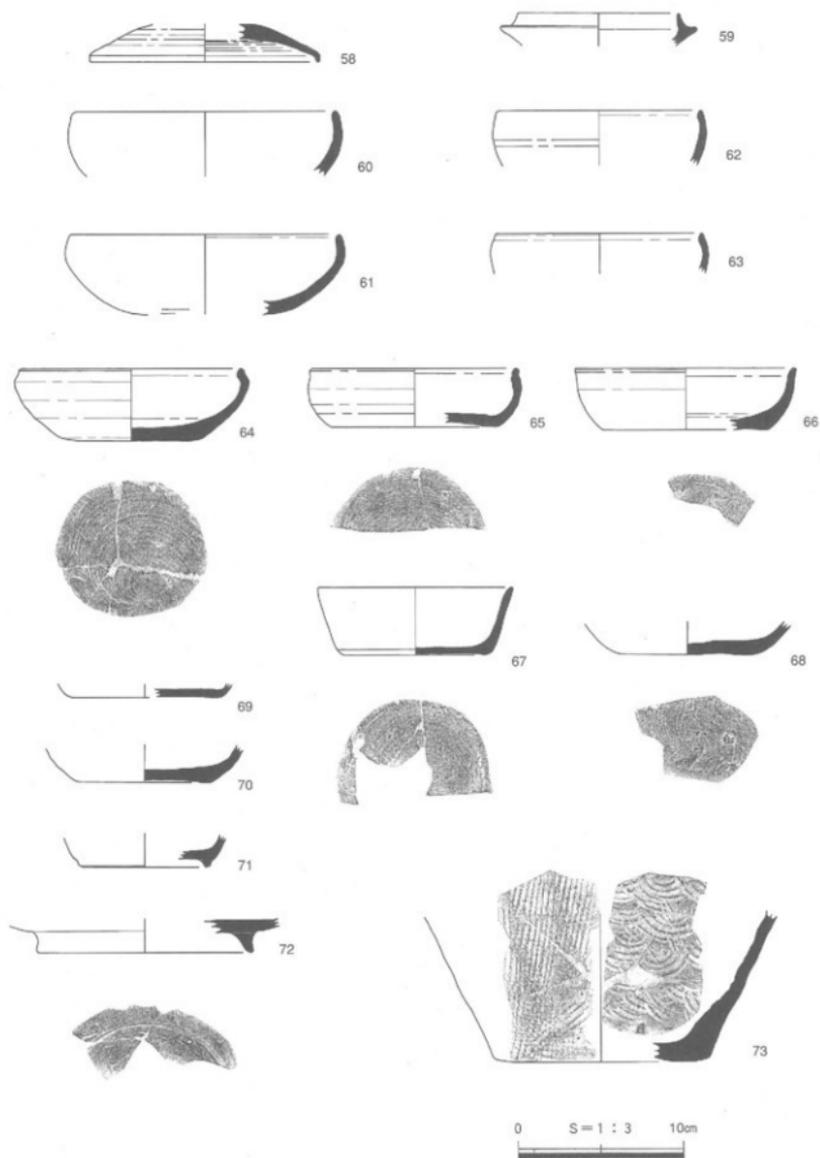


- 1 茶灰色土 (礫混じり)
- 2 黒灰色土 (礫混じり)
- 3 暗褐色土 (礫混じり)

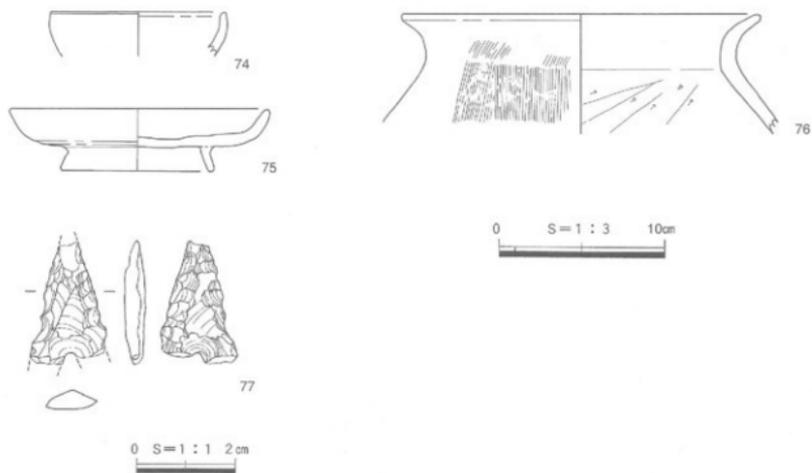
0 S=1:40 1m



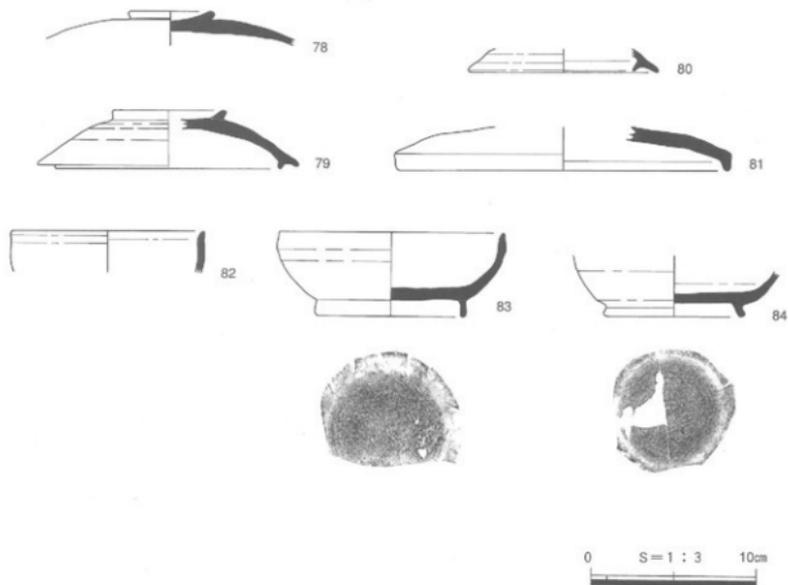
第22図 4区自然流路断面図



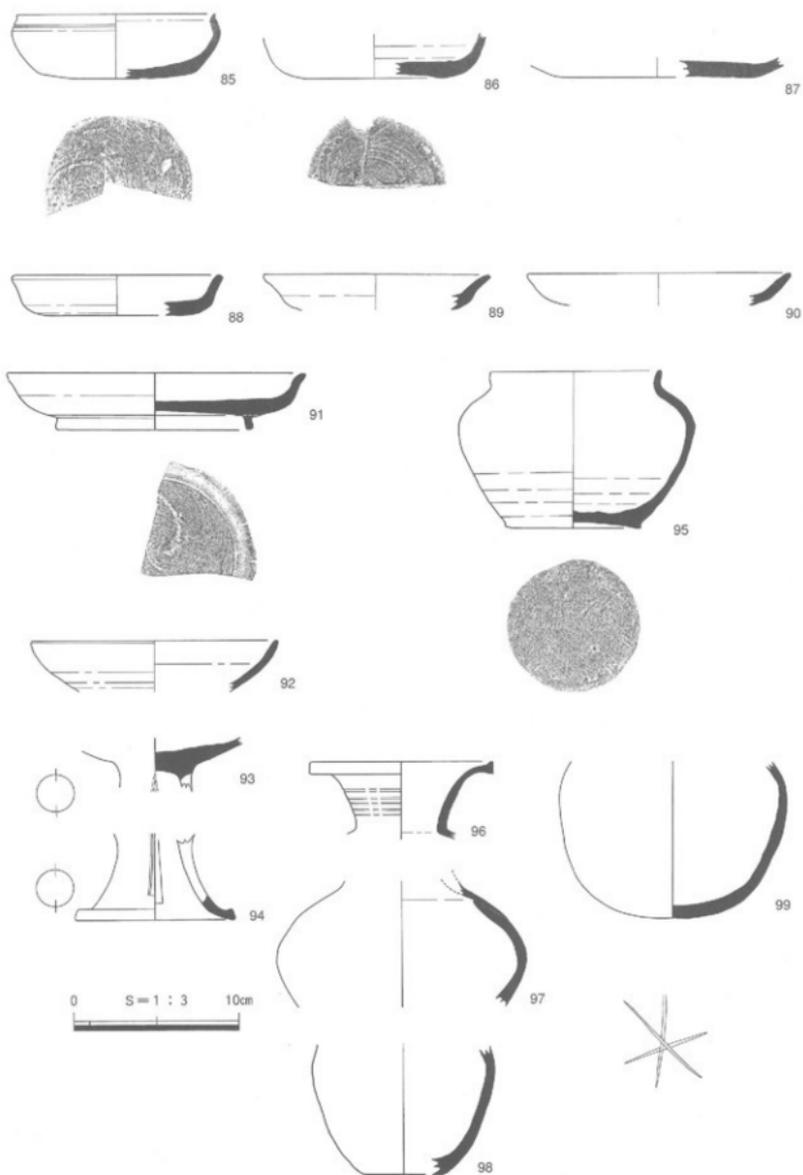
第23图 4区包含层1出土遗物实测图(1)



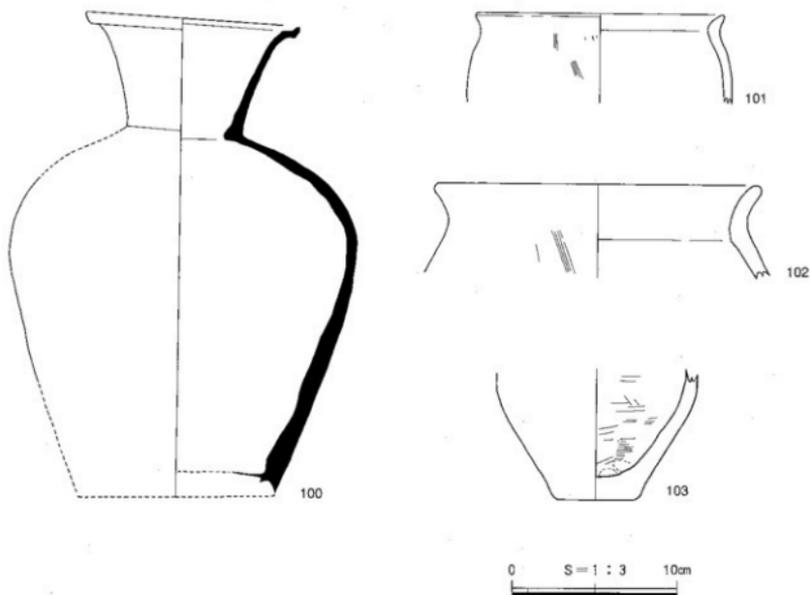
第24图 4区包含层1出土遗物实测图(2)



第25图 4区包含层2出土遗物实测图(1)



第26图 4区包含层2出土遗物实测图(2)



第27図 4区包含層2出土遺物実測図(3)

いずれも底部外面は底部切り離し後ナデ調整を施している。72は鉢あるいは盤の底部であると思われる、高台を有している。また、高台内には爪状圧痕が環状に2条認められる。73は甕で、外面には平行叩き、内面には同心円叩きが施されている。

74~76は土師器で、74は坏身、75は皿、76は甕である。75は八字に開く高い高台を有し、高台内以外の内外面には赤色塗彩が施されている。

77は石罫で、黒曜石製である。

包含層2からは弥生土器、須恵器、土師器が出土した。

78~100は須恵器で、78~81は坏蓋である。78、79の天井部には擬宝珠状のつまみがつき、79、80の口縁部内面には返りがみられる。82~87は坏身で、82、85は内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反し、83は口縁部が内湾する。83、84は高台を有し、84の底部外面には静止糸切りが施され、83、85、86の底部外面には回転糸切りが施されている。なお、83の高台内には環状に爪状圧痕が認められる。88~91は皿で、91は高台を有し、底部外面には回転糸切りが施されている。92~94は高坏で、93、94には2方向に透かし孔が穿たれている。95~100は壺である。95は短頸の広口壺で、底部外面には回転糸切りが施されている。99の底部外面には「米」のヘラ記号が認められる。

101、102は土師器甕、103は弥生土器である。

第4章 ま と め

今回の調査では竪穴住居跡3棟、段状遺構3基、掘立柱建物1棟、自然流路を検出した。

竪穴住居跡はいずれも7世紀前半頃のものと考えられ、丘陵南側裾部に立地している。陰田地区では当該期の竪穴住居跡は丘陵の裾部に立地しており、このような例には陰田マノカンヤマ遺跡^①、陰田第6遺跡^②がある。なお、これらの遺跡は丘陵裾部に6世紀後半～7世紀前半の竪穴住居跡が立地し、丘陵上部斜面に古墳時代後期～奈良時代の段状遺構が展開している。当遺跡では丘陵上部は未調査であるが、当遺跡が立地する丘陵斜面には現況でも段状の平坦面を確認できることから、当遺跡もこれらの遺跡と同様の状況を呈していたものと思われる。

段状遺構は時期を特定できなかったが、第3章で前述したように陰田地区で普遍的に認められる古墳時代後期～平安時代の段状遺構ではないかと考えられる。段状遺構は3基とも切り合っているが、新旧関係は把握できなかった。なお、SS-01とSS-03の壁面裾部には溝が巡り、SS-01には掘立柱建物1棟が構築されている。

自然流路は谷部の中央を谷筋に沿って流れているが、南側の肩が調査区外にかかるため規模は確認できなかった。また、陰田地区では谷部から祭禊遺物が出土しているが、当遺跡ではSD-08出土の土馬以外は祭禊遺物の出土は認められなかった。

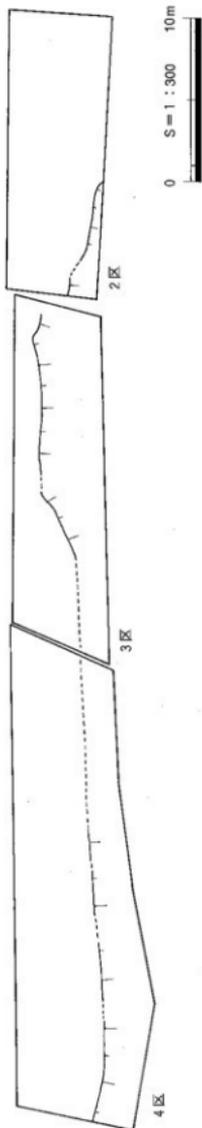
当遺跡が立地する丘陵上には古墳が4基存在しており^③、古墳の調査はされていないが、第6図、1の須恵器がこれらの古墳の時期を示唆するものと考えられる。また、今回検出した竪穴住居跡とこれらの古墳との関係については、時期的にこれらの古墳が先行するものと思われ、直接的には関係がないものと考えられる。

最後に、当遺跡の性格であるが、陰田地区では古墳時代後期～平安時代に鉄生産が行われ、特に7世紀後半以降は官衙的要素を有する遺物（墨書土器、木簡、硯、赤色塗彩土器等）が出土している。当遺跡はこれらの遺物が多く出土し、墨書土器や木簡から「館」の存在が推測される陰田小犬田遺跡^④に近接するという位置にありながら、赤色塗彩土器が数点出土したのみであり、当遺跡では現状では周辺の遺跡と比較すると官衙的要素は希薄である。

また、当遺跡では鉄生産に関わる遺構は確認できなかったが、鉄滓や砥石が出土しており、丘陵斜面の段状平坦面で鉄生産を行っていたものと推測される。

註

- 1 財団法人鳥取県教育文化財団 「陰田遺跡群」 1996
- 2 財団法人鳥取県教育文化財団 「陰田遺跡群」 1996
- 3 米子市教育委員会 「米子市埋蔵文化財地図」 1994
- 4 財団法人鳥取県教育文化財団 「陰田遺跡群」 1996



第28圖 自然道路全体図

圖 版

1区全景 (西から)



SS-01 (西から)



SB-01 (北から)





SS-02 (東から)



SS-02 (西から)



SS-02 (北から)

SS-01・03 (東から)



SS-01・03 (西から)



SS-03 (東から)





2区全景（東から）



2区全景（西から）



2区自然流路（東から）

S I-01 (東から)



S I-01 (西から)



S I-01 (北から)





S I-02・03 (東から)



S I-02・03 (西から)



S I-02・03 P-6
砥石 (21) 出土状況

3区全景 (東から)



3区全景 (西から)



3区自然流路
(東から)





SD-08
土馬 (39) 出土狀況



4区包含層 2
遺物 (84) 出土狀況



4区包含層 2
遺物 (83・93・97) 出土狀況

4区全景（東から）



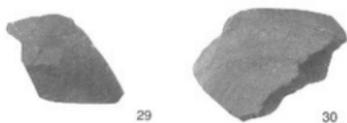
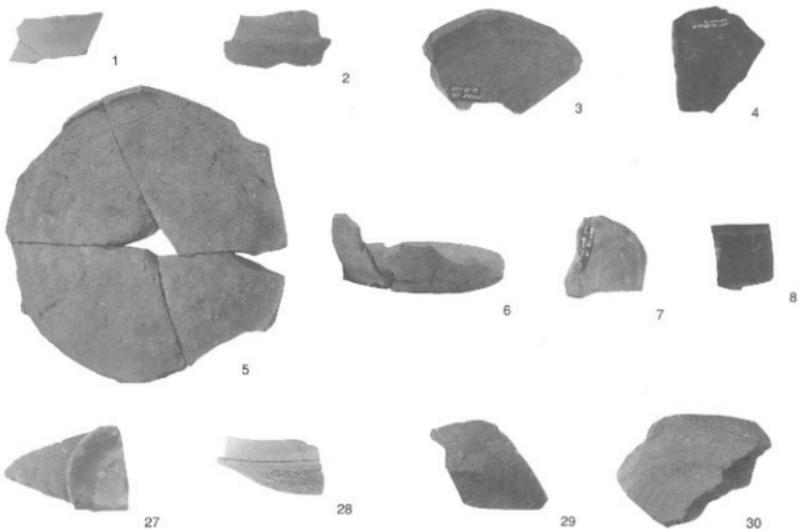
4区全景（西から）



9~14: S I-01
 15~17: S I-02
 18,19,21,22: S I-02·03
 23~26: 2区自然流路
 40,41,45~50: 3区自然流路
 39: S D-08



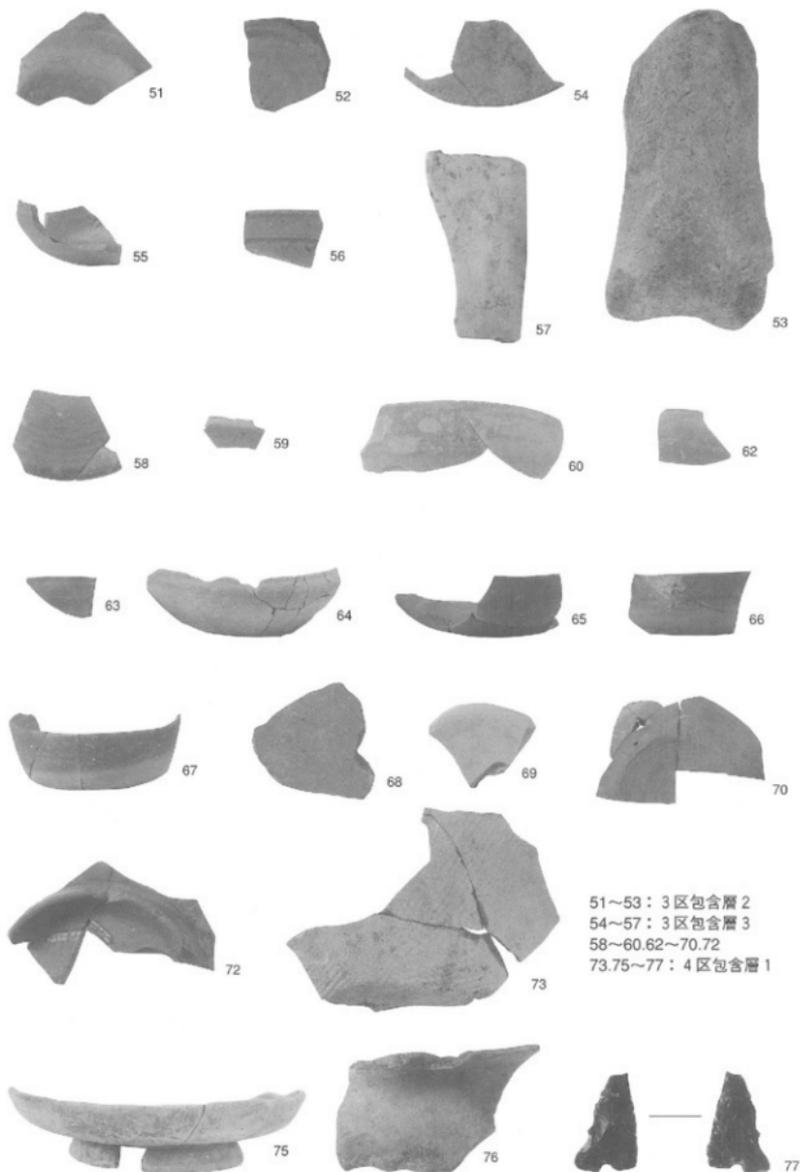
S I-01~03, S D-08, 2区·3区自然流路出土遗物



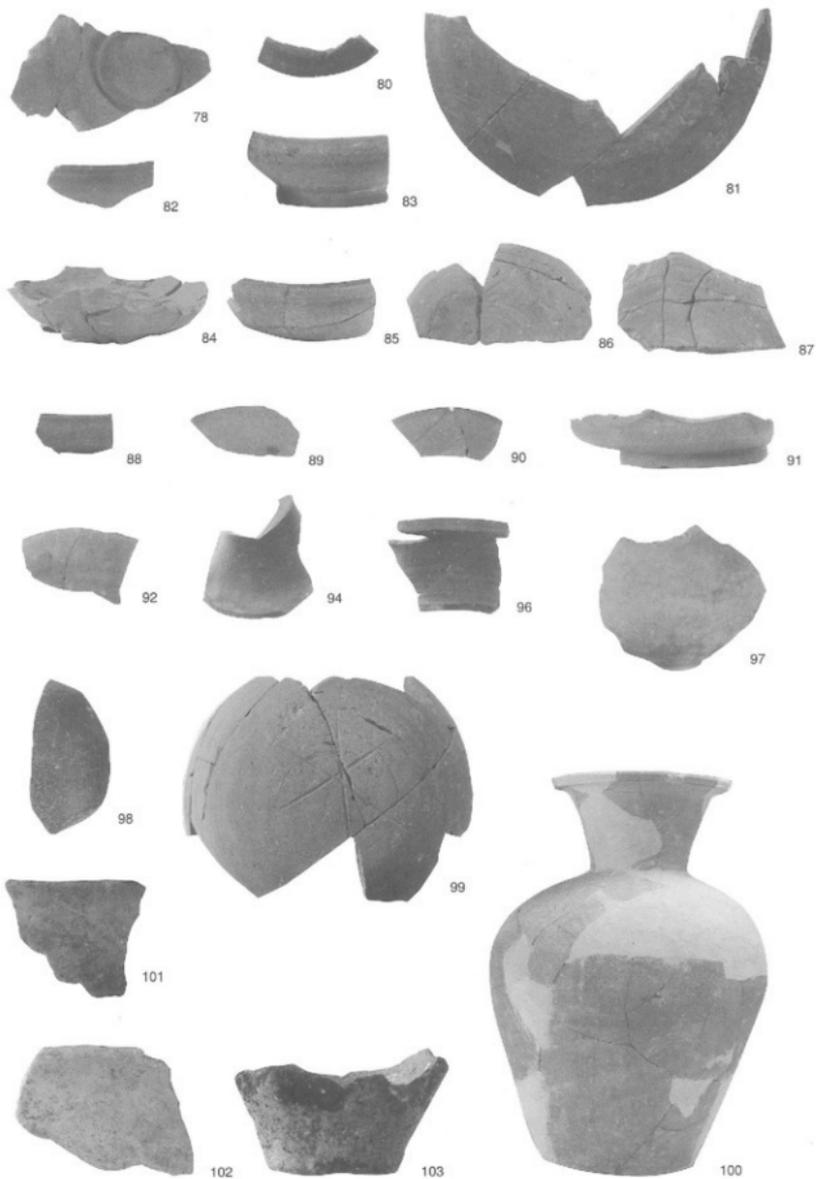
1~8: 1区遺構外
27~30.32.34
35~38: 2区包含層 3



1区遺構外、2区包含層 3 出土遺物



3区包含层2·3、4区包含层1出土遗物



4区包含层2出土遗物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いんだやしきのたにいせき							
書名	陰田屋敷ノ谷遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	46							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1 TEL0859-22-7209							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いんだやしきのたにいせき 陰田屋敷ノ谷遺跡	とっとりけんみこし 鳥取県米子市 いんだやし 陰田町	31202		35度 24分 21秒	133度 19分 31秒	20021001～ 20021121	500㎡	屋敷ノ谷農道改良工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
陰田屋敷ノ谷遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物 溝状遺構 段状遺構 自然流路	弥生土器、土師器、須恵器、土馬 土製支脚、甌、石鎌、礫石、鉄滓				

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書46

陰田屋敷ノ谷遺跡

2003年3月

編集・発行 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0033 鳥取県米子市長砂町935-1

印刷 (有)米子プリント社